

言語活動を取り入れた授業で 自分の考えを伝える力を育む

広島県 神石高原町立油木小学校

神石高原町立油木小学校は、新課程に先駆けて言語活動に取り組んできた。2011年度は、子どもの実態を踏まえ、国語科を中心に据えて取り組みを続けた結果、課題であった分析力や論理構築力が高まったという。

未来を生きる子どもたちに 付けたい力

自分の考えを論理的に組み立てる力

社会に出れば必ず出会う、
多様な考えや価値観を持った人に、
自分の考えを伝える力

新課程を踏まえ 大切にしている取り組み

- ◎算数の取り組みで伸ばしてきた論理的に考える力を基に、研究教科を国語にして、文章を論理的に読み解き、組み立てる力を付ける
- ◎国語や他の教科で、学んだことを活用して表現する
- ◎全教師が研究授業を年3回行うことで、取り組み内容を学校全体に浸透させる

◎背景

自分の考えを分かりやすく
表現できるようになってほしい

神石高原町立油木小学校は、広島県と岡山県の県境の山間部に位置する単学級校だ。子ども同士の仲は良いが、固定された人間関係の中で育つためか、知らない人には言いたいことをうまく伝えられない傾向が見られた。

そこで、2005年度に広島県教育委員会から「ことばの教育」のパイロット校に指定されて以来、「論理的に考える力の育成」をテーマに校内研究に取り組み、どの教師も研究授業を年3回行ってきた。更に、子どもに

S c h o o l D a t a

◎2005(平成17)年、近隣の4校が統合して開校。毎日の清掃後10分間を言語活動に必要な表現力を育む時間「パワーアップタイム」とし、問答ゲームや絵の分析などで子ども同士が説明し合う活動を行っている。



校長 高石昭文先生

児童数 99人 学級数 8学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒720-1812 広島県神石郡神石高原町油木乙1

TEL 0847-82-0926

URL <http://www.jinsekigun.jp/school/yukisho/>

公開研究会 2012年10月10日(水)

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

考えを表現する力を付けさせるため、全学年に言語活動を取り入れている。高石昭文校長は、そのねらいを次のように話す。

「子どもにとって友だちは家族のような存在で、自然と互いの気持ち分かるようです。

しかし社会に出れば、自分と価値観が違う人たちと意思を疎通する必要があります。自分の考えを、言葉で誰にでも分かりやすく伝えられるようになってほしいと考えています」

10年度までの6年間は算数を研究教科として取り組んだ。野崎光弘教頭は、同じ教科に固定した理由を次のように話す。

「言語活動は、授業に取り入れるだけで満足しがちです。そうではなく、教科や単元のねらいを達成するためにはどのように言語活動をとり入れればよいか、同じ教科で研究を重ねれば、理解が深まるだろうと考えました」

授業では、1つの問題に対して複数の子どもに答えと式を立てた理由を発表させ、どの考えが正しいかを話し合う時間を増やした。教師は子どもに、「結論を言ってから根拠を挙げる」などの発言の型を示し、それを使って意見を述べるよう指導した。

●取り組み内容 文章を多く書かせ 分析力と論理構築力を育む

算数の研究を始めて2〜3年で、子どもの様子に変化が表れた。ただ答えを言うだけ

だった子どもが、なぜその式を立てたのかを順序立てて説明できるようになり、他教科・領域でも積極的に発言し、友だちと意見を交換するようになった。

しかし一方で、文章を読み取って論理的に自分の考えをまとめたり、自分の意見を文章で表現して他者に伝えたりすることには課題があったという。文部科学省の「全国学力・学習状況調査」では、記述問題の正答率が低く、無回答の子どももいた。誤答を分析したところ、何が問われているかを正しく把握したり、グラフなどから必要な情報を取り出したりする「分析力」と、条件に合わせて文章にまとめるなどの「論理構築力」をしっかりと伸ばせていない様子が見て取れた。

そこで、11年度は研究テーマをこれまで通り「論理的に考える力の育成」としつつも、研究教科を国語に変えた。説明文を中心に、分析力と論理構築力の向上に力を入れ、研究授業では、2つの力をどのように高めるかを明記して指導案を作った。普段の授業でも、起承転結などの文章構造に注目させる発問を増やす、子どもに文章から根拠を見つけて発言させるなど、指導を工夫した（P.12図1）。文章を書く力も育むため、6年生では習ったことを生かし、単元末に説明文を書かせたり、絵の分析をさせたりした。鳥獣戯画に関する文章を読んだ時は、子どもが好きな絵についてその理由を800字程度で書き、互い

神石高原町立油木小学校校長
高石昭文 たかし・あきふみ
「精神一到 何事かならざらん。努力すれば不可能も可能になることを、自分の行動によって子どもに示したい」

神石高原町立油木小学校教頭
野崎光弘 のぶき・みつひろ
「将来どこに住むようになっても、自分の地域に誇りを持って子どもを育てたい」

神石高原町立油木小学校
指導教諭 研究主任、6学年担任、子ども一人ひとりが楽しく、主体的に参加できる言語活動を広げていきたい」
高延恵 こうのべ・めぐみ

神石高原町立油木小学校
教務主任。「子どもが教え合い、学び合って、共に成長していけるような関係づくりをしていきたい」
藤井博敏 ふじい・ひろとし

に読み合い、感想を付せんに書いた（P.12写真1）。指導教諭・研究主任で6学年担任の高延恵先生は、このねらいを次のように話す。「友だちの文章をただ読むだけでなく、友だちがどのような表現の工夫をしているのかを意識してほしいと思いました。それを付せんに書けば、自分の感想をコンパクトに分かりやすく伝える練習にもなると考えました」
国語以外の教科・領域でも、子どもの分析力や論理構築力を伸ばすための活動を積極的に取り入れた。例えば「総合的な学習の時間」では、調べ学習をレポートにまとめる宿題を

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

図1

国語の1時間の授業における言語活動で育成する力のイメージ図



*同校の資料を基に編集部で作成

出し、考えを文章で表現させた。また、算数では、しっかり読解させるために応用問題の問題文を長くしたり、知識を活用させるため

り組む必要性を、教務主任の藤井博敏先生は次のように話す。「分析力や論理構築力は全ての教科・領域

子どもは分析力や論理構築力は高まってい

に類題を作らせたりした。このように教科・領域を横断して取

国語の教科特性を踏まえ課題を解決していく

で求められます。国語での学びを、他の教科・領域でも生かしたいと考えました」



写真1 自分の好きな絵についての作文で、マルク・シャガール作「青いバイオリン弾き」の感想を書いた。図1の「根拠を明らかにして表現」「筆者の表現の工夫を生かして表現」の部分に当たる

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

る。「全国学力・学習状況調査」では記述問題の正答率が上がり、無回答も少なくなった。

「問題文が長くても、文意を正確に把握できるようになったと思います。記述内容から、問われたことに過不足なく答えようとする姿勢を感じます。友だちの作文を読むことで、分かりやすく書くにはどうすればよいかを考えられるようになったのでしよう。また、子どもの表情からは、作文を書くことを楽しんでいる様子も見取れます」(高延先生)

一方、12年度に向けて課題もあると、藤井先生は話す。

「国語の研究は始まったばかりです。説明文で行ってきた分析力や論理構築力を高める指導を、小説や詩の単元にも広げられるよう、指導法を考えていきたいと思います。12年度以降は授業を今まで以上にじっくり振り返れるよう、研究授業の授業録を作成することを提案しています」

高延先生は、どの子どももしっかり文章を読み取れるよう指導を工夫したいと話す。

「読解に課題がある子どもには、文章のどこに注目すればよいかといったヒントを出すなど、個に応じた手立てを厚くしたいと思います。また子どもは、友だちの考えから多くのことを学びます。深く読んでいる子どもが読み方を友だちに伝えるなど、子ども同士の考えをつなぐようにしたいと考えています」

高石校長は、語彙力を付けるために辞書引

き学習法を取り入れたいと話す。

「豊かな表現力を付けるためには、自在に使える言葉を増やす必要があります。1年生から辞書を引かせ、高学年では更に知的好奇心を刺激するために、大人向けの国語辞典や漢和辞典の活用も検討しています」

●学校経営の工夫

不慣れた教師にも手厚く指導し 教師全員で活動に取り組み

教師全員による研究体制も同校の特徴だ。各学期1人1回行う研究授業では、事前・事後の検討会を必ず実施している。新採の教師や言語活動に不慣れた教師に対する研修も手厚く、4月には研究主任が模範授業、研究授業前には管理職も参加する模擬授業を行う。

「ただ『言語活動をしてください』と言うだけでは、経験のない先生は戸惑うはずですから、ベテランがしっかりと支援することが大切です。本校の良い伝統を次世代に伝えていきたいと考えています」(野崎教頭)

高石校長は、教師が1つにまとまることを重視して学校運営に当たっていると話す。

「子どもによって課題は異なりますから、先生方から子どもの様子を聞くことを大切にしています。本校はこれまでも、研究授業などで浮かび上がった課題を事後検討会や職員会議で共有し、改善してきました。こうした積み重ねによって、子どもの思考力や表現力

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教務主任や研究主任を始め、意欲的な先生がいたからこそ、本校では言語活動の取り組みを継続してこられました。校長として、そうした学校を背負って立つ先生を1人でも増やす責任があると考えています。もっとも、私が目指す指導を押しつけてしまっただけは何にもなりません。先生方一人ひとりの個性を大切に、良いところを伸ばしていきたいと思っています。

校長 高石昭文先生

ミドルリーダーの役割

研究主任の役割の1つは、先生方の模範となる言語活動を行うことだと考えています。十分に準備をして授業に臨むことを心掛け、時間を見付けては若手の先生の授業を見学するようにしています。私が気付いたことはアドバイスし、私が若手の先生の授業から学ぶこともあります。自分の指導に満足せず、より良い指導を目指したいと思っています。

研究主任 高延恵先生

を伸ばせているという実感をどの先生も抱いていると思います。今後も私が見通しを持つた上で、努力を惜しまず、全員で取り組んでいきたいと思っています」